

通崎睦美さん

「木琴デイズ―平岡養一『天衣無縫の音楽人生』」

1977年秋、京都。観客が見守る中、一台の木琴の前に、タキシード姿の男性と10歳の少女がマレット(ばち)を走らせた。

男性は神戸生まれ・尼崎育ちの木琴奏者、平岡養一(07〜81年)。音楽生活50年を記念した全国縦断公演だった。日米を股にかけて活躍。ニューヨーク

のNBCと専属契約を結び、毎朝演奏していたラジオの生番組は「全米の少年少女はヒラオカの木琴で目を覚ます」と言われるほどの人気だった。

彼の一生を資料や音源から丹念に掘り起こしたのが木琴奏者の通崎睦美さん。36年前の演奏会で平岡と共演した少女だ。時を経て2005年、通崎さんは平岡が愛用した楽器に再会。「明

るくすがすがしく、心弾む音色」とほれ込み、マレットや楽譜とともに遺族から譲り受けた。

平岡を調べるうち、書き残す使命を感じたという。「好きだからとこんな人な天才というんだ、と思った」

慶応義塾普通部(中学校)時代に木琴と出合った平岡は、独学ながら20歳でデビューリサイタルを開催した。2年後に単身渡米し、クラシック音楽を中心に腕を磨いたが、日米開戦で帰国。戦後はポップスなど幅広いレパートリーを奏でて国民的音楽家となった。

「年配の方は今でも、戦後日本を元気づけた平岡の木琴に懐かしさを覚える人が多い。『山寺の和尚さん』など



平岡から受け継いだ木琴の前に「次は、平岡さんになつてくれるエピソードを集めたい」と語る通崎さん(京都府下京区)

日米で活躍した演奏家の生涯

つづぎ・むつみ 1967年京都市生まれ。京都市立芸術大学院修了。木琴、マリンバのソリストとして活動。平岡へのオマージュを込めたリサイタル「木琴文庫vol.2」を19日15時、京都府立府民ホール・アルティで開く。otnowa 075・2522・8255

童謡も演奏し、その頃の録音を聞くとおちやめな印象を受ける」

だが平岡のレコードを一枚一枚集めるうち、その音楽性の変遷も見えてきたという。

「デビュー時は自由奔放だったのが、アメリカでは正統派クラシックをまじめに演奏。でも戦後になると、独特のヨレや歌い込みが人を引きつける。音楽の本質をつかみ、心からあふれるまに全身で弾いたのでしょう」。演奏家同士ならではの交感が、それを裏付ける当時の証言とともに伝わる。

ところで、木琴(シロフォン)とマリンバの違いはあまり知られていない。歴史も構造も音色も異なる楽器だが、響きの豊かなマリンバが現在では主流だという。

平岡の楽器と出合ったことをきっかけに、ソリストとして木琴に中心を置くようになった通崎さんは「なんだか平岡さんが同志のようで」と話す。「10歳の時、舞台上で交わした握手が何かの始まりだったのかもしれない」

(神谷千晶・文化生活部)

「木琴デイズ―平岡養一『天衣無縫の音楽人生』は講談社・1995円」